

## 膨張の70年 (PART I)

### プロローグ

日本の近代化は明治維新を起点として考えるとわかりやすい。  
明治維新は、天皇を擁した薩長勢力が官軍となり、鳥羽伏見の戦いで賊軍となった幕府勢力を破って明治新政府を樹立したところから始まる。

世界史的にみるとこの時代はいわゆる帝国主義の時代で、イギリス、フランス、オランダ少し遅れてアメリカ、ドイツ等の先進欧米諸国が統治領域拡大・通商領域拡大で覇を競っていた時代で、日本は被植民地化の恐怖から早急に国を近代的統一国家にまとめ上げ一刻も早くこれら先進国の一員となることが急務であった。

かかる環境下で薩長の下級武士を主軸とした新政府が懸命に取り組んだ諸施策がその後の日本の膨張へとつながっていくのである。

具体的には、国体（天皇制立憲君主国家）、体制（司法・立法・行政機関）を整えながら富国強兵・殖産興業・国民教育を3本柱とした諸施策を進めていくことになる。

### 第1章 維新後

#### (1) 日本の近代化

1868年明治天皇が即位し、翌年都を東京に移し大名支配の土地、人民を朝廷に返還（版籍奉還）させ四民平等としたうえで1871年に廃藩置県を行い国内統治体制の骨組みをつくった。

1872年に学制を定めて全国に小学校をつくり義務教育を開始した。

1873年徴兵令を出し、地租改正条例を公布した。

これによって、国家が軍隊を持つことと国家の財政基盤を安定させることが可能になり、従来の身分制に基づく地方分権、武士層による支配体制を崩して政府による中央集権体制を強固なものに作り上げていった。

次いで行うべきことは国家の体裁を整え、従来の欧米諸国との不平等条約を改正し国際社会で欧米諸国と同等の地位を獲得することであった。

1881年大日本帝国憲法が公布され、1890年帝国議会在開かれた、  
(1890年には教育勅語も発布されている)

一方、西洋近代社会は、アメリカ独立宣言、フランス革命で取り上げられた人権宣言（個人の自由・権利の平等・主権在民）とイギリス産業革命（資本主義的生産様式）が基幹になっており、日本とは国体と精神的基盤が異なっていた。

## (2) アジア近代化の起点（西欧との出会い）

資本主義は国境の枠を越えて拡大する性質があるため、西洋諸国では、イギリスが18世紀のうちに東西両洋へ進出し、オランダ、次いで市民革命を経たアメリカとフランスがこれに続きドイツ、イタリア、ロシアなどが上からの改革を併用しつつ後を追う形となっていた。

西洋諸国の進出は、アジアにも大きな変革を齎した。  
インド、シンガポール、インドネシア、その他アジアの大部分の国は（白人）宗主国の移民植民地（立法、司法、行政の3権すべて喪失）となり、中国、日本、タイは交渉条約国（行政権の一部である外交権と通商権と司法権の一部が条約によって制限）となったが、中でも中国はアヘン戦争、アロー戦争敗北により、賠償金の支払い、領土の割譲、内国行政（関税、治安等）の一部喪失等の従属化が行われた。

アジア史における近代では、従属、貧困の開始、それに対する抵抗や民族独立運動等を含めて考える必要がある。

## 第2章 膨張の軌跡

### (1) 1875～1920年

#### ① 琉球処分

1872年琉球王国を琉球藩とし、1874年には琉球漁民の殺害に対する報復を口実に明治政府は台湾に出兵、清国と対立したが、イギリスの仲介により和解。その和解文面に「日本国臣民に害を加え」という一文があったことから琉球が日本の一部と認められていると解釈し琉球併合をおしすすめることとした。

1879年日本政府は軍隊と警察を派遣して首里城を占拠、沖縄県の設置を宣言した。

## ② 日清戦争（1894～1895）

李氏朝鮮の地位確認と朝鮮半島の権益をめぐる争いが原因で、朝鮮半島、遼東半島、黄海が戦場となった

日本では、政治指導者、軍事指導者ともに帝国主義下の国際環境の状況認識がほぼ一致しておりさらに政治の優位を自明としていたが、清国は外交と軍事が不統一でかつ戦争回避派（西太后等）もいる等国家を挙げて戦う体制ではなかった。

1年4か月余の戦いは日本が勝利し、下関条約の調印で戦争は終結した。

この条約で、清国の李氏朝鮮に対する宗主権の放棄・日本に対する台湾、澎湖諸島、遼東半島の割譲、巨額の賠償金が決められたが、直後三国干渉によって遼東半島は清に返還された。

多額の賠償金(国家予算の2倍以上)の大半は戦費と軍拡費に使われたが、製鉄所創立等もあり“日本の近代工業国としての本格的発足は、実に日清戦争を画期とする”と位置付けられている。

一方、清はこの敗戦を契機として半植民地化が急速に進み、滅亡（辛亥革命）への道を進むことになった。

## ③ 日露戦争（1904～1905）

朝鮮半島と満洲の権益をめぐる争いが原因で、満洲南部と遼東半島が主な戦場となった。

日本は戦費調達（ジェイコブ・シフの協力等）、諜報と内部撓乱（明石・シリアクスの連携等）も成功。戦況も陸戦に続いて日本海海戦も勝利したが、ロシアは内陸に強大な陸軍兵力を温存したまま、アメリカの仲介により終戦した。

イギリスは日英同盟で第3国の参戦をけん制するなど陰に陽に日本を支援した、

ポーツマス条約で日本は、遼東半島の租借権、東清鉄道の長春～大連の支線、朝鮮半島の監督権、樺太の南半分を得たが賠償金は得られなかった。

日本国内では賠償金が得られなかったことに対して東京の日比谷公園で「講和反対国民大会」が開かれ暴動がおこった、

清国と「満洲に関する条約」を結び、同地へ進出する足掛かりをつくった。

日本の勝利は、イギリスをはじめ列強諸国に日本の評価を高からしめ、不平等条

約の改正をすすめ後の5大国の一角を占める一因となり、ロシアは極東への南下政策を断念した。

#### ④ 日韓併合（1910）

日清戦争後の下関条約で清は李氏朝鮮を独立国と認めた。

3国干渉後、韓国は親露政権（閔妃）となったが乙未（いつび）事変で閔妃が日本、朝鮮人に暗殺されると1897年に国号を大韓帝国と改めた。

その後、日露戦争を挟んで、

第1次日韓協約（1904年：財政と外交の顧問に日本の推薦者を置くことを定めた）

第2次日韓協約（1905年：外交権を日本に譲渡し、日本の保護国となる）

第3次日韓協約（1907年：高級官吏は日本がおいた韓国統監府が定めた日本人になることが定められ、内政も日本の管理下に入った）

が締結され、韓国は事実上日本の保護国となった。

韓国統監府は1905年12月に勅令で設置が決められ、伊藤博文が初代統監となったが、1907年ハーグ密使事件が起こり、この事件の結末として高宗が譲位し統監の権限強化をうたった第3次日韓協約が締結されることになった。

ハーグ密使事件とは、1907年オランダのハーグで開催されていた第2回万国平和会議に高宗が3人の密使を送り、自国の外交権回復を訴えようとして、主張文（抗告詞）を会議参加各国委員に送り、支援を要請したが拒絶された事件である。

（アメリカ、イギリス、フランス、ドイツは要請を拒否、ロシア、オランダは面会すら拒絶した）

1909年10月初代の韓国府統監伊藤博文がハルビン駅頭において抗日闘争に加わっていた安重婚によって射殺されると、日本は朝鮮の抗日運動を抑えることを口実に翌1910年8月寺内正毅統監と李完用韓国首相により韓国併合条約が締結された。

#### ⑤ 第1次世界大戦（1914～1918）

第1次世界大戦は、帝国主義国家がドイツ・オーストリアを中心とした同盟国イギリス・フランス・ロシアを中心とした京商国の2陣営に分かれ、ヨーロッパを主戦場として戦い、同盟国側にオスマン帝国、協商国側に日本、少し遅れてアメリカが参戦して世界的規模の戦争となった。

1917年のアメリカ参戦とロシア革命を主因として、戦争は協商側の勝利と

なって1918年に終わったが、戦後のパリ講和会議とベルサイユ条約を契機に世界は大きく変貌することになった。

- ・ 新型兵器として、飛行機・戦車・潜水艦・毒ガスが戦場で使用されるようになった。
- ・ 戦争は長期化し、塹壕をほって対峙する形となり物資・輸送・補充力等長期的・総合的な国民国家としての総力戦の様相を呈するようになった。
- ・ ロシア、オーストリア=ハンガリー、ドイツ、オスマン帝国で専制君主制国家が崩壊し、その支配下にあった地域での諸民族独立への動きが強まった。
- ・ 米国ウイルソン大統領の提唱で国際連盟がつくられ、国家間の協議によって紛争を解決しようとする“集団安全保障”が意図されたが、当の米国のほか、ソ・独も不参加でスタートした。
- ・ 同ウイルソンの理念“民族自決”に沿って、ハンガリー、チェコスロバキア、ポーランド、バルト3国（エストニア、ラトヴィア、リトアニア）、フィンランドが独立し、ユーゴスラビア（ボスニア・ヘルツェゴビナ、セルビア、モンテネグロ）は建国した。  
・・・アジア・アフリカでも民族の独立を求める運動が本格化した。・・・
- ・ 日本は、日英同盟を理由に参戦し、中国膠州湾入り口の青島を陥落させ、さらにドイツ領太平洋諸島のマーシャル、マリアナ、パラオ、カロリン諸島を占領しパリ講和会議の結果、日本はドイツ領太平洋諸島の委任統治権を獲得した。
- ・ ヴェルサイユ条約でドイツに対して課せられた過酷な賠償責任は、将来への大きな禍根となった。

完

#### 参考文献

##### Wikipedia

日本近代史	遠山茂樹
戦争の日本近現代史	加藤陽子
琉球処分（内務省編）	琉球見聞録 喜舎場朝賢
日清戦争と韓日関係	東北アジア歴史財団
日露戦争と「菊と刀」	森貞彦 …… 他